

## うたとことばからヒトの進化を考える

## An Essay on the Emergence of Singing and Speaking in Human Evolution

下地 秀樹

SIMOJI, Hideki

## 1 はじめに

ヒトはうたいながらことばを紡ぎはじめたのだろうか。それとも、ことばを重ねあわせながらうたうことを覚えていったのだろうか。

この問いは、紛れもなく人間の人間自らの由来に対する問いの一つであるが、日常素朴には前者の問いを意識することは少ないと思われる。ここで、ヒトといい、うたといい、ことばといって、人間とも歌や音楽とも言葉や言語とも記さないのは、少なくとも人間ならざるヒトや、学問的定義を厳密に満たす音楽ならざるうた、そして言語ならざることばについての思弁を排除したくないからである。

以下、言語起源論について、とくに J. J. ルソー以来の言語の音楽起源論に注目して今日までの流れを概観する。各論者の概念に依拠しながら、うたとことばともつかぬ起源への思索を辿ってみることで、現代人の「類としての自己理解」の一端を明らかにし、人間を総合的に理解する足がかりとしたい。

## 2 言語起源論の盛衰

## (1) 言語の音楽起源論：ルソー

うたいながらことばを紡いだ可能性を明確に示唆した端緒は、ルソーの言語起源論である。ルソー死後の 1781 年に出版された *Essai sur l'origine des langues : ou il est parlé de la mélodie et de l'imitation musicale* は、執筆時期は判然としないが、一説にはあの『人間不平等起源論』（1755

年発表）より先か、ほぼ同時期には草稿ができていたという。全体として副題の音楽論に傾きがちだが、主題は言語の起源を論じることであり、次の一節には言語の音楽起源論が端的にあらわされている。

「人間は欲求を表現するために言葉を発明したと言われているが、この意見は私には支持しがたいように思われる。欲求は当初、自然の成り行きとして人々を離ればなれにしたのであって、近づけあうものではなかった。（中略）人々を離ればなれにする原因から、人々を結びつける手段が生じたというのは、背理であろう。それならば言語の起源は、どこに発しているのか。精神的な欲求、つまり情念からである。（中略）最初の言語は、単純で整然としたものであるよりさきに、歌うような、情熱的なものだったのである。」（ルソー 2012：158f／傍点引用者）

言語神授説を批判し、叫び声や身振りを言語以前の表現手段とする思考実験が、すでにコンディヤックによって行われていた。ルソーはこの表現手段について、自然の動物的欲求に発するのではなく、情念に発するものとする。ここで注目しておきたいのは、単語や文法を思わせる単純で整然としたものが最初ではないとしていることである。音楽家でもあるルソーは、音楽と言語の一致を理想としているが、この時代はまさに「音楽のカンブリア爆発」が起こ

る頃で、むしろ「ことばと音楽の分離」こそがその起爆剤となった（東条 2012：202-205）。

## （2）言語起源論の禁止から進化言語学へ

ルソーが言語の起源を音楽と関連させて論じた頃、ベルリンの王立科学アカデミーでは言語起源論が最大の話題となっていた。1769 年、言語の起源を明確に説明する論文が公募され、最優秀にヘルダーの『言語起源論』が選ばれている（1772 年出版）。ここでヘルダーは、ルソーが「人々を結びつける」コミュニケーションを重視したのに対し、「自然の経済性」原理から人間に固有の反省的意識（理性）を言語発生の原点に据えた。現代にもいたる言語観の大きな対立が、ここに反映されている（尾関 1983：29-34）。

この後、ヘルダーを頂点とするあまりに哲学的で思弁的なアプローチに代わり、民族学と生物学による実証科学的アプローチがはじまった（坂本 1991：49）。その大きなインパクトとなったダーウィンの進化論でも、言語の音楽起源論が支持されている。ダーウィンは、「言語はさまざまな自然の音、他の動物の声、そして人間自身の本能的な発声を、記号や身ぶりの助けを借りながら模倣し、変容させることから生じたに違いない」とし、人間の昔の祖先は「音声を、主に真に音楽的な旋律、つまり歌を歌うことに使っていただろう」、「音楽的な発声を音節化された音でまねることから、さまざまな複雑な感情を表現する単語が生まれたのかもしれない」と推測している（ダーウィン 1999：58）。そして、性淘汰について詳述するなかで、「人間の祖先の男性、女性、または両性が、音節化した言語によってたがいの愛を表現する力を獲得する前に、すでに音楽的な調べやリズムによってたがいを魅了していたとい

うことは、あながちあり得ないことではないだろう」と音楽の先行を示唆している（ダーウィン 2000：407）。

ダーウィンが言語の起源をこのように推論した頃、パリ言語学会（Société de Linguistique de Paris）でも、ロンドン言語学会（Philological Society of London）でも、言語の起源に関する研究をタブー視させる出来事があった。

パリ言語学会は 1866 年、創立とともに定めた会則の第 2 条で、「言語起源および普遍言語構築に関するいっさいのやりとりを認めない」とした。これは、今日まで言語起源論に関する研究でしばしば言及された有名な史実であるが、例えば「実証的な証拠が乏しいところで思索をするだけなので」、「状況を憂慮したパリ言語学会は、1866 年、言語の起源と進化に関する論文を受け付けないことを決めた」（橋本 2004：124）、と論文禁止のインパクトとして伝えられてきた。

これに対し、山内肇は同学会がこのわずか 10 年後の 1876 年にはこの会則第 2 条を放棄したこと、会則施行当時、まだ学会誌は存在せず、第 2 条が禁じたのは論文の提出ではなく会合で議題とすることだった事実を紹介している（山内 2012：35f）。山内によれば、そもそも同学会の創設は、第二帝政末期にいたる複雑な政治情勢のもとで、言語学者よりもむしろ民族学者が主導してのことであり、学会内外の種々の思惑から、政治的妥協として件の会則第 2 条は設けられた。だが、同学会の対立と分裂は続き、第三共和政下で会則の見直しを求められ、第 1 条と第 2 条は破棄されて、同学会は「民族学的な方向性を修正し、真正の言語学会へと生まれ変わった」（同上：42-49）。

一方、ロンドン言語学会では、明確に言語起源論

を攻撃する講演が、1873年、理事長のエリス（A. J. Ellis）により行われた。エリスは実証主義の音声学者であり、言語起源研究は比較言語学の射程にはないとし、「人の原型言語などという、単なる当て推量に基づく研究で紙くずカゴを満たすことではなく、ありふれた言語を一つ取り上げ、その歴史的变化を辿ること」に傾注するべきだと主張している（同上：49）。

こうして、言語起源研究はその後の約一世紀間、言語学プロパーから抹殺されることになったが（坂本 1991：57）、今日ではまた異なる様相で蘇っている。その発端となったのは、20世紀半ばの認知革命である。チョムスキーが唱える生成文法は、言語データの分析を主とする記述言語学のパラダイムを根底から変容させ、言語を人間に固有かつ普遍的な生物学的形質と捉え、言語学を人間生物学として再編成させるものであった。この流れのもと20世紀末以降、言語の起源と進化に関する研究が急速に盛んになり、進化言語学（Evolutionary Linguistics）という新しい分野が形成されるまでになっている。そこには言語学、認知科学、生物学、考古学、人類学、脳神経科学、哲学、計算機科学など多様な領域の研究者が関わり、学際的に活況を呈していて、この新領域は根本的な人間理解とともに、諸科学の統合を可能にするものと謳われている。言語の起源と進化とは、「生物進化上の最大のハード・プロブレム」であり、真の意味での人間理解に近づくための「最後のフロンティア」というわけである（藤田／岡ノ谷 2012：1f）。

### 3 言語の音楽起源論の現在

#### （1）歌文法の進化と言語の産声起源説：岡ノ谷一夫

進化言語学は日本においても本格的な展開の兆しを見せており、これをリードする岡ノ谷一夫の研究は、言語の音楽起源論を再興させるものとして、とりわけ注目に値する。

岡ノ谷の研究でまず何よりユニークなのは、ジュウシマツの研究から言語の起源に迫っていることである（岡ノ谷 2003）。意表を突かれるようだが、言語はいかに人間特有のものであっても、やはり進化の過程で獲得されたはずであり、その起源の生物学的探究として「前適応説」を採用するということである。例えば、鳥の羽毛は保温の機能がやがて翔ぶ機能に適応したと考えられるように、言語とは直接関係のない、他の機能のために進化してきた機能がいくつか組み合わさって、まったく新しい機能として言語が生まれたと考えるのである（岡ノ谷／小川 2011：18f）。現代の理論言語学に従い、言語を概念意図システム、感覚運動システム、その界面としての統語システムからなるものとし、相似的推論によって動物行動のなかに概念意図システム、感覚運動システムの前適応とみなせるものを探索し、それらの相互作用として統語システムが創発し得るかどうかを考える。統語システムとは、概念意図システム（心）に浮かんだ想念をコミュニケーションの文脈（感覚運動システム）に、コミュニケーションの文脈で受理した信号を想念に変換する装置ということである（岡ノ谷 2012：118）。

岡ノ谷によれば、ジュウシマツのオスは実に複雑な鳴き方をするが、じつくりと粘り強くデータを取り続けた結果、それは決してデタラメではなく、一定の規則性、つまり文法を有していて、しかも個性的な歌になっていることが明らかになった。ヒナの頃、周囲の成鳥の鳴き声を聞き覚え、真似しながら、学習しながら、生後70日くらいで歌（鳴き方）を

構成する基本的な音響特性を獲得し、120 日程度でその配列規則が決まり、成鳥としての歌を鳴きはじめる（岡ノ谷 2010 : 61）。

鳴くという歌を歌う行為は、基本的には求愛のためである。複雑な歌であるほど、捕食圧のなかで優秀性を示すのでメスは惹かれる。ジュウシマツの原種はコシジロキンパラで、ちょうドルソーが言語起源論を著していた 18 世紀の半ば頃、中国の南部から輸入され、やがて安政年間にその白色変種が愛玩されるようになりジュウシマツと呼ばれるようになった。家禽化されたことで、捕食圧も採餌のコストもなくなって複雑な歌の学習が可能となり、その歌の複雑化という性淘汰がいまなお進行中であると考えられる。この 250 年ほどの間に 1000 世代相当の世代交代を続け、コシジロキンパラからは想像し難いほど歌は複雑化した（同上 : 81）。

岡ノ谷は、このジュウシマツの歌文法の発見から、内容（意味）と形式（文法）は独立して進化したのではないかと着想し、「状況と音列の相互分節化」説を構想した。冒頭の問いに帰してみよう。うた（というもの）はことば（単語）を組み合わせで成立する。ことばがあるからうたがある。ことばを獲得した人間は、まずはそのようにしか考えられないだろう。ことば以前にうたなるものがあったとは、およそ想像し難い。しかし、まず意味内容を伴った単語ができて、それから文法ができたという言語起源論の方が、むしろ無理があるのではないだろうか。文法の進化が、性淘汰のみによるものかどうかは留保されとしても。

「漠然とした状況に対応した漠然とした歌が、状況と歌節の相互分節化を繰り返すことにより、だんだんと具体的な状況に対応した、より短い音列

が作られるであろう。これらの過程で、音列の切り取り方という文法規則と、その一部がどのような状況に対応するのかという意味規則とが同時に作られていく。」（同上 : 112f）

例えば、狩りという状況と食事という状況で、それぞれうたのようなものが繰り返し歌われ、そのなかである共通の音節が切り取られ、「みんなで〇〇（狩り／食事）しよう」という意味として分節化する、というわけである（岡ノ谷 2013 : 141-143）。

個体発生は系統発生を繰り返すかのように、実は人間はつねに個性的に、この相互分節化を実践してきているとも言える。赤ん坊と母親（養育者）の「相互カテゴリー化」である。母親は赤ん坊の泣き声により、しだいに排泄後（オムツ）なのか空腹（ミルク）なのかそのサインを聞き分けていく。これは一方的に成り立つことではなく、赤ん坊もまた母親の対応によって自らのサインの有効性を覚え、使い分けていく（岡ノ谷／小川 2011 : 59）。このようなその母と子だけに通用することばは確かにあり、子はこの過程を経て言葉を覚えていくが、やはりまず単語があって覚えるのではなく、リズムカルな音の流れのなかで、音節を区切り判別することが、言語獲得の前提となっているのではないだろうか。

ところで、人間の赤ん坊は大声でけたたましく泣くが、これは近縁の霊長類には見られないことだという。また、呼吸のコントロール、端的に自分で息をとめることは、人間の他には鳥類（の一部）とクジラ類（の一部）にしかできないようである。前者は大空を飛翔するために、後者は深海に潜るために、呼吸のコントロールが不可欠であるが、この呼吸のコントロールができなければ、発声学習などできるはずもない。だから、人間に最も近縁であっても、

チンパンジーに音声言語を教え、実践させることは土台無理な話なのである。解剖学的な根拠を補足すると、大脳皮質運動野と延髄呼吸発声中枢の連結により発声信号を意図的に変調する発声可塑性に、聴覚発声系ミラーシステムの作用が加わって、ようやく発声学習が可能になるが、人間に近縁の霊長類には、ミラーニューロンはあっても前者の発声制御に関わる神経線維が痕跡程度になっており、だから人間と鳥類（の一部）とクジラ類（の一部）にしか、発声学習は見られないということである（岡ノ谷 2012 : 122-125）。

岡ノ谷は、ジュウシマツ以外にも数種類の動物のコミュニケーションを研究した結果、言語発生の要素として発声学習、文法、意味、社会の四つを取りだした。そして、これに人間の赤ん坊についての考察を加え、次のようにことばの習得条件を整理し、言語の「産声起源説」を唱えている。

- ・人類は社会集団をつくるようになり、外敵に襲われる危険性が少なくなったため、赤ん坊が大きな声で泣いても大丈夫になった。
- ・赤ん坊は、親をコントロールするために、大きな声、いろいろな泣き声を出すようになった。
- ・より大きく複雑な泣き声を出すためには、呼吸をコントロールする機能が有利になった。
- ・呼吸をコントロールする機能を持ったため、人間は「発声学習」が可能になった。
- ・そのため、「ことば」の習得が可能になった。

（岡ノ谷／石森 2010 : 109）

呼吸の意図的制御を前適応として発声学習が可能になり、これを基盤に複雑な音列をコミュニケーションに使う行動が進化した。同時に、様々な社会的状況をラベルする必要性が生じ、ある時点で音列と状

況の相互分節化が励起される社会となった。音列の階層性と意味の階層性が生じると、文化的にこれらが精緻化され信号と脳の共進化が起これり、人間の言語として進化していく。ジュウシマツの発声信号はヒトのそれと比類し得る複雑さを有するが、歌により伝達する概念意図が極めて限定されるため、文法は有限状態にとどまっている。人間の言語は、概念意図システムの量的複雑化により統語システムが質的に複雑化した故に特異性を有している。これが岡ノ谷による生物言語学的な言語起源論である（岡ノ谷 2012 : 129f）。

## （2）音楽と言語の先駆体：歌うネアンデルタール

岡ノ谷の研究から、生物進化の過程で人間の言語が成立する基本的な要件を理解する示唆が得られた。では、人類（ヒト）進化のなかで、人間はどのような道筋を経て今日の言語を獲得することになったのだろうか。そのストーリーの一つとして、「認知考古学」の第一人者とされるスティーヴン・ミズンの『歌うネアンデルタール』を参照しよう。ちなみに、岡ノ谷はミズンを参照しているが、管見の限りではミズンが岡ノ谷を参照した形跡はない。

ミズンは、これまで音楽の起源についてはあまり研究されてこなかったとしながら、音楽と言語の関係についての考察を整理する。最も主流派は、「音楽は言語進化の単なる副産物」であり、進化の上で考えるには無益とする説である。この考え方は、音楽と言語の人間社会における普遍性を考えればあり得ない。では、音楽から言語が進化したのか。これも、両者の独自性を考えればありそうになく、また両者はまったく独立に進化したとするのも、両者の共通性を考えればありそうにない。結局、考えられるシナリオは、両者に共通する先駆体があり、そこ

から両者は分化したというものだとし、両者の共通性、独自性については、次のように述べている。

「音楽と言語は、人間社会に普遍的に見られる特徴である。どちらも、発声、動作、筆記によって表現できる。どちらも、豊かな表現法を持った階層的な組み合わせシステムであり、再帰性のある規則に依存し、有限の要素群から無限の表出ができる。どちらのコミュニケーション体系にも身振りや体の動きがある。(中略)だが、両者はちがいても大きい。話し言葉はシンボルからなり、文法規則によって完全な意味を与えられ情報を伝達する。定型表現はあるものの、言語の発話は構成的だ。一方、音楽のフレーズや、身振り、身体言語は全体的だ。「意味」は、フレーズ全体が一体となって生じる。話し言葉は指示的で操作的だ。世のなかの物事を指し示す発話もあれば、聞き手に特定の考え方や行動をうながす発話もある。一方、音楽は同調によって感情や身体の動きを誘導するため、おもに操作的だ。」(ミズン 2006 : 43)

確かに、有限の要素群から無限の表出を可能にする「再帰性」(recursion)こそが、他の動物にはない人間の人間たる所以であり、人間にとって普遍的なことであろう。この特性に関わっては、言語の獲得ばかりが強調されるが、音楽にもっとこだわった方がいいのかもしれない。

ミズンは、音楽の普遍性の実証を可能な限りの材料を駆使して試みる一方、言語については、単語を原型とする「構成的 (compositional)」原型言語説は、近年までは優勢であったが、誤った方向に導く説であり、「全体的 (holistic)」原型言語説こそが本質をついていると評価する (同上 : 14f)。全体的

とは、言語の先駆が単語ではなくメッセージからなるコミュニケーション体系だったということである。この説は、全体的発話が分節化されて単語が生まれ、その後、それを組み合わせて新しい意味を持つ文をつくるようになったとするもので、岡ノ谷の相互分節化説と概ね適合する。

ミズンは脳科学や医学、心理学の知見を博搜して音楽と言語の脳における根拠を探り、ヒトの身体的進化や文化的遺物から、ヒトのことばの進化の足跡を抉り出していく。例えば、音声的グルーミングの洗練化といった興味深い視点や、IDS (infant-directed speech : 乳幼児への発話) の普遍性、赤ん坊は音の切れ目の判別能力を有していて、天性の音楽家であるとするなど、岡ノ谷の課題意識とも符合する見解がちりばめられている。これらを整理概略すると、初期のホミニド (hominid) から初期人類に進化するにつれ、体と脳が大きくなり、難産で養育の負担が増していったが、母親はつねに子どもを抱き上げているわけにもいかず、地面に下したとき、歌うようなことばかけが有効であったという仮説になる。非常に推測しやすい進化の道筋で、岡ノ谷の「産声起源説」に補完的示唆を与えたのかもしれない。そして、ミズンはこの仮説のキーコンセプトとして、先に述べた音楽と言語の共通の先駆体を想定し、これを Hmmm あるいは Hmmmm と名づけている (同上 : 45)。

Hmmm は、Holistic (全体的)、multi-modal (多様式的)、manipulative (操作的)、musical (音楽的) ということ、それぞれの特徴は類人猿にも見られるが、およそ 200 万年前までの初期のホミニドではすべてが統合されていた (同上 : 196f)。その後、初期人類の進化のなかで、脳の大化と複雑な音声への解剖学的適応が成立し、食料探しや配偶競

争, 親子関係, 集団活動からくる高度なコミュニケーションへの選択圧が生じたので, コミュニケーション体系は Hmmmmm にもう一つ mimetic (ミメシス的) が加わり Hmmmmm になった。ここでミメシスとは, 「意図的ではあるが言語的ではない表象行為を意識的, 自発的におこなう能力」で, これが加わったことにより, 新たな道具の進化, 移住, 火の使用, 大物狩りが可能になっていったのではないかということである (同上: 237f)。

さて, ミズンが主題に掲げるネアンデルタール人は, われわれ現生人類, ホモ・サピエンスにきわめて近い絶滅種で, 19 世紀半ばに科学的研究の対象となって以来, 現生人類との関係が問われ, 野蛮, 獣的として下等視する見解とそうでない見解が交錯し, 論争の種となってきた。20 世紀の後半には, 現生人類とは混血すらない別種との見解が定着しつつあったが, 今世紀に入り分子レベルでの研究が進展した結果, 現生人類の一部はネアンデルタール人と交雑し, その遺伝子を受け継いでいるとする説が発表されている。

ミズンは, ネアンデルタール人が 20 万年以上にわたって寒冷地で気候の大変動を乗り越えて生き延びてきたことを重視し, 考古学的な遺物から, 博物的知識や技術的知識を伝承し協力的な社会関係を築き上げていたはずであるとして, 彼らの知性を評価する。しかし, 同様にして考古学的な検証により, その社会は親密で小規模な共同体であり, 象徴的人工物はなく, したがって, 象徴的思考は欠如しており, その文化は極度に固定されていたので, ホモ・サピエンスのような言語を用いたとは考えられないとする。要するに, 彼らには博物的知識, 技術的知識, 社会的知識の蓄積がありながらも, これらの「領域」を結びつけることができず, その知能は特

化していた。これに対し, ホモ・サピエンスには「認知的流動性」がある。これは脳の容量を要する問題ではなく, 僅かな変異の産物かもしれない, とミズンは推測する (同上: 322-332)。

ここまでならば, 前著『心の先史時代』(ミズン 1998) の論調と変わらない。『歌うネアンデルタール』では, ネアンデルタール人が大きな脳を有していた潜在的可能性をまだ解明しきれていないとして, 彼らのコミュニケーション行動と感情豊かな生活の理解を課題としている。そこで, 彼らには言語こそなかったかもしれないが, Hmmmmm があり, しかもかなり高度に洗練化されていたと推理する。高度な狩りをし, 異性を口説き, 子どもをあやす歌声は洗練され, 地上に満ち溢れていた。言語を持たないが故に, 彼らは絶対音感を維持したまま成長した可能性が高い。高次の Hmmmmm により, 現代人を含む他のホモ属に比べ高度な音楽能力を持っていて, だから脳は大型化していた。しかし, この高次の Hmmmmm は, おそらく小規模共同体ごとに独自のもので通用範囲は狭く, 思考や文化の静止状態を打破するものではなかった (ミズン 2006: 332-334)。

一方, ホモ・サピエンスは Hmmmmm を音楽と言語に分化させ, 進化させてきた。それは, やはり僅かな突然変異によってもたらされたのだろう。2001 年に言語障害の家系の分子的研究により発見されて以来, 俗に言語遺伝子などと喧伝されることもある FOXP2 遺伝子の偶然の僅かな変異により, ある神経回路をつなぐタンパク質が合成されたのかもしれない (同上: 354f)。ある回路がつながることで, 従来はつながっていなかった回路が五月雨式につながり, 新たな機能が可能になった, ということは十分に考えられる。聞く能力については, 古人骨の研究から 30 万年ほど前までには音の知覚が現代人 (現

生人類)と同様になったという見解もあるが(同上:323),内耳に影響する遺伝子の変化の痕跡から,現生人類には複雑な言語レベルに応じた聴覚の変化が生じたことを証明できるとする見解もある(コ克蘭/ハーペンディング 2010:11)。

ネアンデルタール人などホモ・サピエンス以外の人類がすべて絶滅したことで, Hmmmmm は地上から姿を消した。現生人類が音楽により心揺さぶられ, 一体感をもたらされる存在だとすれば, その危険性は否めないものの, それは抗いようもない人類の長い進化の過程に確かな基盤があるということだろう。音痴を自認するミズンは, 音楽を聴こう, 聴いて自らの進化の過去に思いを馳せようと提唱してこの研究を締めくくっている(ミズン 2006:394)。

#### 4 おわりに: 普遍性と多様性と……

初期ホミニドの Hmmmmm は脳が大型化した初期人類では Hmmmmm に進化し, 脳がさらに大型化したネアンデルタール人は, Hmmmmm を高度に洗練させ, 他の人類にはない音楽能力を有していた。一方, ホモ・サピエンスは Hmmmmm を音楽と言語に分化させ今日にいたっている。ミズンは, このように音楽と言語の進化を語っている。

再び冒頭の問いに戻ると, 現代人にとって歌はことばが歌詞となって成立するものであっても, ことばの起源をたどっていくなら, 神授説をとるのではない限り, 整然とした単語や文法がまずあってうたが誕生したわけではないだろう。岡ノ谷の仮説に示唆されるように, 単語を構成する種々の複雑な音素が確立するまでには, ヒトはうたのような高低, 強弱をともなったさまざまな音列を駆使してコミュニケーションをはかっていたと考えられる。言語の起源は, このような意味でのうた(のようなもの)で

ある。歌も言語も同じ発声構造と聴覚系のデバイスにより成り立ち, おそらくこれら进行处理する脳内のメカニズムもかなり共通したものだろう。

ミズンを待つまでもなく, われわれ現生人類にあつては音楽と言語は分化し, 別々の進化を歩んできた。生物種として見れば, 地球上のすべての人々はみな同じホモ・サピエンスであり, ネアンデルタール人との混血があつたとしても, ホモ・サピエンスとネアンデルタール人は種を異にし, 現在, 地球上に複数種の人類が生存しているわけではない。だから, 音楽能力に優れていたとされるネアンデルタール人の, 高度に洗練された Hmmmmm を確認する術はない。ただ想像されるのは, ホモ・サピエンス以前の Hmmmmm あるいは Hmmmmm を用いた人類たちは, 地球環境に壊滅的な負荷をかけることなく, ひっそりと自然に還って行ったということである。そんな彼らの, うたともことばともつかない Hmmmmm を想像させる何かは残っていないのだろうか。

手がかりは少なくとも二つある。一つは, 個々人の言語獲得という, 当人にとっては明確な記憶がない, それぞれ一度限りの過程である。この多様で個性的な過程には, 赤ん坊が生きようと懸命に泣き, 母親(養育者)が歌いかけるようにあやすという普遍的な相互作用が機能しており, これが言語の起源だとすれば想像しやすく, なぜか癒される。

もう一つは, 現存する世界の多様な言語文化のなかに, うたうような言語がないかどうかということである。D.L.エヴェレットによるピダハン(Pirahã)語の研究は, ホモ・サピエンスの普遍的な捉え方に対する衝撃と評しても過言ではない。

言語の起源に関する研究は, 18 世紀においては思弁的哲学的であつたが, 人間そのものへの関心と一体のものであり, その意味で人間の普遍性への探



究であった。これが「禁止された」という19世紀後半以降は、比較言語学など多様な実証的研究が盛んになっていくが、ここでは人類の起源の複数性（多地域性）が排除されいなどころか優勢でさえあった（山内 2012 : 46f）。20世紀の後半以降は、世界中の現存する人類はすべて同一のホモ・サピエンスと考えられており、人間の言語の普遍性を唱える理論言語学にさまざまな研究領域が合流して、言語の起源に関する研究が活性化している。エヴェレットの研究は、この普遍志向に一石を投じている。

エヴェレットは、キリスト教の伝道師としてブラジル・アマゾンの支流のまた支流沿いに生きるピダハン部族の村に赴き、聖書のピダハン語訳を試みるうち、ピダハンの文化と言語の理解が深まり、ついには信仰を捨て、長年苦楽を共にした妻子とも別れるにいたった。伝道師は無神論者となり、「現存するどの言語とも類縁関係にない」とされるピダハン語の研究歴は、すでに30年以上に及ぶ言語学者である。

ピダハン語は、声調やアクセント、音節の重みなどを駆使し、発声される言葉は口笛や鼻歌、叫びや歌のように聞こえるということで、まさに音楽的な言語である（エヴェレット 2012 : 255）。「ディスコースのチャンネル」は多彩で、現代言語学理論では文化的背景は音声構造に関与しないとされるが、その文化を理解できなければ、およそ音声構造を理解できない。語りは体験の直接性が原則であり、時制がなく、関係節も等位接続もないということで、あらゆる言語に普遍的なはずのリカーション（recursion, 再帰）がない（同上 : 317f）。このエヴェレットの分析には、当然のことながらチョムスキーをはじめとする言語学者たちが一斉に反発し、論争が勃発した。わずか400人ほどのピダハン部族

以外にピダハン語を話す者はエヴェレットを含めて世界に3人しかおらず（彼の元妻と前任の伝道師）、如何せん分が悪い。

ピダハン部族は、数世紀にわたって外国の思想や哲学、技術などをいっさい取り入れようとはせず、伝道師の布教もブラジル政府をも拒んできた、いや無関心を通した。外部の影響を受けない親密な社会であるが故に、ピダハン語の話し方はエクソテリック（exsoteric）、普遍的ではなく、エソテリック（esoteric）、外部からはわかりにくいもの、文化によって比較的狭く限定されたものとなったと考えられる（同上 : 284f）。

チョムスキー派が主張するように、ある構成要素を同種の構成要素に入れ込むリカーションは、有限の方法を無限に用い、言語の無限創造性をもたらす基本的な道具である。しかしエヴェレットは、ピダハン語にはリカーションを示す声調上のしるしも単語もなく、文と見えるものは動詞の意味を補完する単語の連なりに、最低限の修飾語を合わせたものに過ぎないとし、このピダハン語の例から、「文法が人間の遺伝子に特定の位置を示す必要などない」と論じている（同上 : 329-332）。

この著書が発表された後に、オーストラリアの Essential Media and Entertainment の制作により、エヴェレットとピダハンを主題とした The Amazon Code というドキュメンタリーが2012年に発表され、同年末にはその日本語版がNHKの「地球ドラマチック」で放映されている。これによると、ピダハン語が普遍文法の反証例となるかどうかをめぐり、マサチューセッツ工科大学（MIT）の研究グループとエヴェレットが共同で調査チームを結成したが、ブラジルで先住民保護にあたる組織 FUNAI により、エヴェレットらの計画は拒否された。しかし、撮影班の

取材だけは許可され、その際の録音記録が過去のそれ（エヴェレットによるものと前任の伝道師によるもの）とともにMITのグループにより分析され、その結果はエヴェレットの主張を支持するもので、ピダハン語にはリカージョンを示す明確な例が見当たらないという。それでもチョムスキーらは、分析方法が拙撰で、リカージョンは人間の遺伝子に備わっているとして納得していない。

エヴェレットも、リカージョンが脳の全般的な認知能力の一過程であることは認めており、彼が主張しているのは、あくまでもピダハン語の文法構造にリカージョンがないということである。文法にリカージョンがなく、したがって有限であるからといって、ピダハンの言語そのものが有限なわけではなく、ピダハンの物語にはリカージョンが見られる、とも述べている。個々の文章ではなく、物語の着想が別の着想のなかに組み込まれるという形でリカージョンが見られる、ということで、これは厳密な意味での統語的要素ではないとしている（同上：333-335）。

エヴェレットの研究を受けて岡ノ谷は、ピダハン語に再帰的表現がないのだとすれば、ピダハンの人々には「死への恐れもないのでしょうか」と述べているが（岡ノ谷 2013：148f）、彼らも断るまでもなくホモ・サピエンスであり、その脳裏にリカージョンがないわけではない。ただ、過去を後悔することも、将来を不安に思うこともなく、只管現在にのみこだわって生きる彼らは、精神的に安定していて、幸せそうだという。文化の自律性を守り、外の便利な商品を取り入れることと葛藤に陥ることもなく、自分たちの環境に順応しきっている彼らの姿に、エヴェレットはすっかり魅了され、自らの思考を大きく転換させた（エヴェレット 2012：380-385）。

アマゾンに住む彼らピダハン部族は、ホモ・サピ

エンスのなかでも最も長い移動の果てに一万年前頃に当地に辿り着いたはずである。以後、その文化をほとんど変えることなく、特異な音楽的言語を用いているのだとすれば、アフリカ外に拡散していく数万年前のホモ・サピエンスの言語構造を、かなりの程度保存している可能性が考えられる。あるいはそうではなく、辿り着いた環境に順応するうちに、緊密な社会で外部の影響を受けないが故に特異な言語構造を獲得したのかもしれない。エヴェレットは、ニューギニア、オーストラリア、アフリカなどで、リカージョンを必要としないエソテリック・コミュニケーションの緊密な社会が見つかるだろうと予想しているが（同上：336）、いずれにせよ、リカージョンはホモ・サピエンスの宿命だとしても、その文法構造に遍く見られるようになるのは、ホモ・サピエンスの歴史のうち比較的後の時期からのことなのだろう。

先のドキュメンタリーThe Amazon Codによれば、エヴェレットが訪れていたときはピダハン部族の村も激変しており、ブラジル政府による診療所、定住用住宅、電気などの設備を受け入れはじめ、さらに子どもたちは学校に通い、ポルトガル語を学んでいるという。ホモ・サピエンスの来し方を振り返ると、開拓者、植民者たちは、先住民の生命と文化と社会とを根絶やしにしてきた。世界は多様性を損ない、急速に均質化に向かっていっているように見える。エヴェレットのような研究は、世界の多様性を明るみに出す、最後の灯なのだろうか。それとも、「先住民の権利に関する国連宣言」（2007年）を一つの契機に、均質化の流れもいくらか変化し、多様性のなかに普遍性を探るあゆみが続けることができるのだろうか。

## 参考文献

- D.L. エヴェレット (2012) 『ピダハン「言語本能」を超える文化と世界観』(屋代通子訳) みすず書房=Everett, Daniel L. (2008) Don't Sleep, There Are Snakes : Life and Language in the Amazonian Jungle. Pantheon Books.
- 岡ノ谷一夫 (2003) 『小鳥の歌からヒトの言葉へ』岩波書店
- 岡ノ谷一夫 (2010) 『さえざり言語起源論 新版 小鳥の歌からヒトの言葉へ』岩波書店
- 岡ノ谷一夫 (2012) 「進化言語学の生物学的構築」(『進化言語学の構築』所収 第7章 ひつじ書房)
- 岡ノ谷一夫 (2013) 『「つながり」の進化生物学』朝日出版社
- 岡ノ谷一夫／石森愛彦(絵) (2010) 『言葉はなぜ生まれたのか』文藝春秋
- 岡ノ谷一夫／小川洋子 (2011) 『言葉の誕生を科学する』河出書房新社
- 尾関周二 (1983) 『言語と人間』大月書店
- G. コ克蘭／H. ハーペンディング (2010) 『一万年の進化爆発 文明が進化を加速した』(古川奈々子訳) 日経 BP 社=Cochran, Gregory / Harpending, Henry (2009) The 10,000 YEAR EXPLOSION : How Civilization Accelerated Human Evolution. Brockman Inc. New York.
- 坂本百大 (1991) 『言語起源論の新展開』大修館書店
- Ch. ダーウィン (1999／2000) 『人間の進化と性淘汰』(Ⅰ 1999年／Ⅱ 2000年)(長谷川真理子訳) 文一総合出版
- 東条敏 (2012) 「われらの脳の言語認識システムが生み出す音楽」(『進化言語学の構築』所収 第11章 ひつじ書房)
- 橋本敬 (2004) 「言語進化とは何か?」『大航海』52号, 新書館
- 藤田耕司／岡ノ谷一夫(編) (2012) 『進化言語学の構築 新しい人間科学を目指して』ひつじ書房
- 藤田耕司・岡ノ谷一夫 (2012) 「進化言語学の構築を目指して」(『進化言語学の構築』所収 第1章 ひつじ書房)
- S. ミズン (1998) 『心の先史時代』(松浦俊輔・牧野美佐緒訳) 青土社=Mithen, Steven (1996) The Prehistory of the Mind : A Search for the Origin of Art, Science and Religion. Thames and Hudson/Orion, London
- S. ミズン (2006) 『歌うネアンデルタール 音楽と言語から見るヒトの進化』(熊谷淳子訳) 早川書房 = Mithen, Steven (2005) THE SINGING NEANDERTHALS : The Origins of Music, Language, Mind and Body. Weidenfeld & Nicolson Ltd, London
- J. J. ルソー (2012) 『人間不平等起源論 (原好男訳)／言語起源論 (竹内成明訳)』: 白水 i クラシックス ルソーコレクション (川出良枝選)『起源』所収, 白水社
- 山内肇 (2012) 「パリ言語学会が禁じた言語起源」(『進化言語学の構築』所収 第3章 ひつじ書房)

下地 秀樹 (立教大学)